静岡発 こう読む

「コロナ」をどう記録するか

▶▶▶加藤裕治

テレビでは連日、コロナ感染者数の増減や自粛の呼び掛けといった内容が多かったが、五月あたりからコロナ禍を、冷静に見つめて報じる番組が現れてきた。

記憶に残ったのは、NHKBS1で五月四日に放送された「封鎖都市・武漢～76日間市民の記録～」。一月二十三日から四月七日まで封鎖された中国・武漢の状況を、一人の女性のウェブ日記と北京のネットラジオ局の放送を通して描き出すドキュメンタリー。淡々とした日記の記述が、逆に事態の深刻さを伝える（日記は郭晶著『武漢封城日記』として台湾で出版された）。

「封鎖って何？　いつまで続くの？　私はどうすればいいの？　全てがわからない」。封鎖当日の記述は、素朴だが、漠然とした不安が漂う。後からの回想や追体験では出てこない切迫感がある。

先の見えない封鎖の中、仲間をコロナで亡くした清掃員から「怖くてたまらないが働くしかない」と聞かされる。不安の中で仕事をせざるを得ない労働者によって、コロナ禍の社会が支えられていることを、この一言が明らかにする。

また、Eテレで六月六日に放送された「マスクが消えた日々～医療現場をどう守るのか～」も興味深かった。友人の看護師による医療現場のマスク不足の叫びから疑問を持ったディレクターの調査報告だ。当然、外出や直接取材はできない。そのため自宅からリモート取材を試み、医療現場、メーカー、卸売業者の証言を聞きながら、医療マスク不足問題の核心に迫っていく。

結果として「医療現場のコスト削減で、医療用マスクは利益が上がらない商品」になり「輸入に頼らざるを得なくなった」との結論にたどり着く。背景には診療報酬の問題が漂うが、現時点の証拠で言えることだけにとどめ、論点が分かりやすかった。

双方とも問題設定はシンプルだ。「封鎖下の生活は？」「なぜ医療マスクがないの？」。そして、この状況下でできる取材を淡々と着実に進め追求する。内容だけでなく、その態度と手法も見習うべき点が多かった。

（静岡文化芸術大学教授）

2020.6.28
中日新聞（朝刊）P.5